

新河岸川の舟運

新河岸川の舟運は、寛永15年(1638)の火事で焼失した仙波東照宮の再建資材が寺尾村の河岸から運ばれたのが始まりとされています。この後、上新河岸、下新河岸、扇河岸、牛子河岸などが開設され、江戸時代、川越と江戸を結ぶ重要な物資輸送路として隆盛を極めました。

当初は年貢米などを主に運び、次第に農産物や建築材料などを江戸に、また肥料の干鰯や糠のほか、砂糖などの嗜好品を江戸から運ぶようになりました。後には、定期便である早船に人乗せるようになりました。

明治になると仙波河岸が新設され、舟運は重要な交通路として活用されました。しかし、大正3年(1914)に東上鉄道(現在の東武東上線)が開設されると、鉄道が輸送の中心になり、長きにわたった新河岸川舟運はやがて終わりを迎えます。



新河岸川早船運賃改正広告(部分・個人蔵)

博物館では企画展

「新河岸川舟運と川越五河岸のにぎわい」を開催し、江戸時代から明治時代にかけて栄えた新河岸川の舟運と河岸場の様子を中心に紹介します。

日程：3月23日(土)

5月12日(日)

経費：入館料



ロマネスコ(カリフラワー)

ヨーロッパ原産のカリフラワーは、キャベツと同じ

イタリアの伝統野菜である「ロマネスコ」は、ヨーロッパではポピュラーなカリフラワーの一種。見た目はゴツゴツとして、全体的には円すい形。食べるにホクホクした食感をしています。「旬のこの時期、甘さがぐっと増してきます」と栽培する飯野芳彦さん(今福)。一度食べるとリピーターになる人が多いそうです。「ロマネスコ」で、イタリアの冬の味覚を味わってみませんか。



チーズフォンデュの具材にも合いますよ、と飯野さん

アブラナ科の野菜。日本には、明治時代に伝来し、戦後、食文化の変化により全国に広まりました。

食用の部分は花蕾といい、この部分が白色やオレンジ色、紫色などの種類があります。疲労回復に欠かせないビタミンCが豊富で、加熱しても損失が少ないのが特徴です。



特徴的な形のロマネスコ

編集後記

ぶらぶら

東

日本大震災から、まもなく2年。いつ起きるか分からない災害・震災への備えは十分ですか。改めて確認してみましょう。

非常持ち出し品や備蓄品

中身を出して、不足の品や期限切れ食料などをチェック。最低でも3日分は必要。

避難場所と連絡方法

自宅だけでなく勤務先や通勤・通学途中の避難場所も確認。家族が離れ離れになった場合の連絡方法なども確認。

そ

れでもいざというとき、冷静に行動できるか、身の安全は守れるか不安です。そんなとき「自分たちの地域は自分たちで守る」ために作られた自主防災組織が重要な役割を果たします。地域で行う防災訓練や災害に備えた話し合いが地域の防災力を高め、連帯感を深めます。

自主防災組織や非常持ち出し品など、詳しくは市ホームページ↓もしもの時↓防災情報から確認できます。